

3 腫瘍随伴性天疱瘡を合併した濾胞性リンパ腫の1例

小堺 貴司・黒羽 高志・林 雅子
 西山 紫・北嶋 俊樹・柴崎 康彦
 阿部 崇・瀧澤 淳・青木 定夫
 鳥羽 健・相澤 義房

新潟大学医歯学総合病院第一内科

症例は50歳、男性。口腔内のびらんで初発し、徐々に体幹部に皮疹が拡大していった。皮膚生検の結果、腫瘍随伴性天疱瘡が疑われた。悪性腫瘍検索中に末梢血中にCD10陽性のリンパ腫細胞が61.5%認められ、CTにて腹部に巨大腫瘍を認めた。開腹生検の結果、濾胞性リンパ腫(Grade 1)と診断され、リツキサン併用THP-COP療法にて皮疹、リンパ腫ともに改善傾向を認めた。

天疱瘡は表皮細胞表面に対する自己抗体が表皮細胞間の接着を障害して表皮内水疱形成を生じる自己免疫疾患群であり、そのうち腫瘍随伴性天疱瘡は主にリンパ増殖疾患を基礎疾患として多彩な皮膚病変を生じる予後不良かつ稀な疾患である。今回の症例のように治療が奏効した例は少数報告のみであり報告することとした。

4 虚血性心疾患における耐糖能変化の検討

今井 俊介・畑田 勝治・松原 琢

信楽園病院循環器科

【目的】糖尿病は虚血性心疾患(IHD)のリスクファクターであり、2次予防の観点からも糖尿病の管理と早期発見は重要である。IHD患者における耐糖能障害の有病率と新規発症率について検討した。

【方法】2001年11月から2007年3月までの間に、当院で複数回の心臓カテーテル検査を行ったIHD患者430名(男性320名、女性110名、年齢 68.6 ± 10.4 才)を対象に、ACS群211名と非ACS群219名に分け、耐糖能障害の有病率と新規発症率について検討した。糖尿病の明らかでない患者には、入院に際し積極的に75g-OGTTを行った。

【結果】初回入院時、ACS群でDM 55%、IGT

22%、非ACS群でDM 58%、IGT 15%と、何れも7割以上が何らかの耐糖能障害を有していた。観察期間 12.5 ± 12.7 ヶ月において、耐糖能障害(IGT+DM)発症はACS群8名(16%)、非ACS群15名(25%)であり、DM発症はACS群5名(10%)、非ACS群6名(10%)と高頻度であった。

【結論】虚血性心疾患において糖尿病の有病率が高いのみでなく、ACS群、非ACS群で共に初回心臓カテーテルから2年の間で20%以前後に新たな耐糖能障害が出現しており、外来での厳密な管理が必要と考えられた。

5 分娩後に発症したたこつぼ型心筋障害

八木原伸江・佐藤 光希・太刀川 仁

伊藤 正洋・塙 晴雄・小玉 誠

新潟大学医歯学総合病院第一内科

症例は41歳、女性。緊急帝王切開にて双子を出産。術後1日目、歩行後しばらくしてから呼吸困難感を訴え、胸部聴診上湿性ラ音を聴取した。呼吸状態の悪化のため人工呼吸管理を開始した。

心電図は洞調律、V1, 2でST上昇を認め、入院時に比し胸部誘導にてR波の減高あり、心エコーでは全周性に壁運動の低下(後壁の基部のみやや動いている)を認め、血液検査上はCK 305 IU/l、CK-MB 60 IU/l、CRP 13.54mg/dlと上昇を認めた。挿管直後は収縮期血圧140台であったが徐々に低下し、60台となったためカテコラミン持続静注を開始した。

心筋炎等を疑い心臓カテーテル検査を施行した。冠動脈造影は正常、左室造影では心尖部は瘤状で心基部のみわずかに収縮を認め、たこつぼ様であった。翌日の心電図でSTは基線に復し、V2~6で陰性T波を認めた。心エコー上壁運動の改善を認め、たこつぼ型心筋障害と診断した。

分娩直後にたこつぼ型心筋障害を発症した症例を経験したので報告する。